

**特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果，世界的位置付けなど。**

**( 評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容 )**

**< 特筆すべき教育活動 >**

- ・学部教育では、第一セメスターに少人数教育を主眼とした「現代における農と農学」や、フィールド科学に実際にふれる「陸圏環境コミュニケーション論」、「水圏環境コミュニケーション論」など新カリキュラムを開設し、農学の基礎教育を充実させた。
- ・全学フィールド環境教育の講義を平成 21 年 10 月より試行し、平成 22 年 8 月に開講した(受講者 12 名)
- ・休学者や成績不良者に対する支援制度を整備した結果、平成 21 年度の未卒業者は 13%と、15 年度の 16%を下回った。
- ・大学院では、平成 21 年度の学生による原著論文発表数が 106 報と高い水準にある。
- ・平成 21 年度の学生による国際学会での発表件数が 77 件と、平成 15 年度の 38 件に比べ 2 倍以上に及んでいる。
- ・平成21年度の J S P S 特別研究員への採用は 8 名である。
- ・学生の受賞数も31件に及んでいる。学位授与率は修士90%・博士60%と高い水準にある。
- ・学生による授業評価アンケートを継続し、教育効果を図っている。

**< 特筆すべき研究活動 >**

- ・平成 21 年度の原著論文や著書などの公表数は 592 と、15 年度の総数 306 の 1.9 倍以上に及んでいる。
- ・特に英文の原著論文は 411 報であり、国際的に評価の高い雑誌への公表も数多くある。
- ・主な雑誌は次の通りで、雑誌名のあとに 2009 年のインパクトファクター (IF) を記載した。  
 J. Clin. Invest (IF15.387)、Angew. Chem. Int. Ed (IF11.829)、Proc. Natl. Acad. Sci. USA (IF9.432)、Plant Cell (IF9.293)、PLoS Genetics (IF8.883)、Leukemia (IF8.296)、Plant Journal (IF6.946)、Plant Physiol. (IF6.235)、New Phytol. (IF6.033)。  
 これら以外にも、IF が 3.0 以上の雑誌が約 30 種類にも及び、本研究科の高い研究活動を示している。
- ・平成 21 年度に海外で開催された国際会議の招待講演は 33 件である。
- ・科研費の平成 21 年度の採択状況も順調で、15 年度の 2 億 7 千万円より、直接経費で約 1 億 8 千万円増加している。
- ・平成 21 年度本研究科教授が春の紫綬褒章受章「牛の卵子が育つメカニズムを解明」など、生殖研究での多くの業績を挙げ受章した。
- ・平成21年度科研費新学術領域研究(高CO2環境イネの光合成とバイオマス生産に与える影響と解明)の計画研究代表として採択された。
- ・平成21年度名誉教授が日本学士院賞受賞「新規生物機能性分子の創製とその応用に関する研究」に対し受賞した。
- ・平成21年度各関連学会の奨励賞・学会賞を 6 件受賞した。

**< 特筆すべき社会貢献活動等 >**

- ・ 各省庁や公的機関の専門委員やプロジェクトの評価委員等を数多く務めており、平成21年度は農林水産省農林水産技術会議評価分科会委員、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(16名)、大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員などを輩出し、日本の学術研究推進にあたり大きな貢献をした。
- ・ 本研究科教員は所属学会で会長や理事などの委員を務めるほか、カルチャー講座・みやぎ県民大学・公開講座・講演等(平成21年度17件)、小中高校との連携による出前授業や部局への受入など(平成21年度28件)、地域社会にも多大な貢献をしている。
- ・ フィールド科学を実際に体験できる地域開放事業や、高校生対象の臨海実習・小学生対象の総合学習や海洋講座など、地域社会にも多大な貢献をしている。21年度の実績は次のとおりである。
  - フィールドセンター開放講座 2回実施
  - フィールドセンター共催行事 2回実施
  - 臨海実習・セミナー等を 6回実施
  - 鳴子小総合学習等12回実施
  - 近隣小学校、保育園等の来場体験学習 6回実施
- ・ 「科学者の卵 養成講座」への活動に参加し、21年度には3名の教員が講義をし、2名の教員が研究室での実習を実施した。